
僕が君に出来ること。

夢太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が君に出来ること。

【Nコード】

N9855E

【作者名】

夢太

【あらすじ】

杉山が通う高校に急遽入ってきたユメ。小学生の時に少しだけ出会った、小さな恋をしていた。思わぬ再会に喜ぶ杉山だったが、ユメは……。その真意とは。

再会〜小学生1〜（前書き）

まだまだ初心者で読みにくいと思いますがよろしく願います。
なるべく早く続きをどんどん書けるように頑張ります。

再会（小学生1）

「はじめまして。幸村ユメです。宜しく願いします。」黒いシヨートヘアの少女が言った。

B北高校の2年7組の男たちはその少女に見とれていた。その時に杉山雄一郎は違和感に包まれていた。なにかが引つ掛かる。

「なんか、知ってる気がするんだよね・・・。」杉山は呟いてみた。すると、霧がゆつくりはれるように、ぼやけていた輪郭が現れるように、記憶が鮮明になり、転校生の少女に繋がった。

「あつ・・・。」杉山が声を漏らすと同時に、数名が杉山に目を向けたが、俯き加減のままで動かない杉山から、すぐに転校生の少女に視線が戻された。

杉山だけは、これを知っていた。記憶という箱の隅に追いやられていた過去が、いとも簡単に箱の真ん中に移った。

幸村ユメという名前も黒いシヨートヘアも、自己紹介の発言の時に少し左下を見る事も杉山は見た事があった。

「じゃあ、幸村は廊下側の後ろから二番目の空いてる席に座ってくれ。」担任の先生が言った。

幸村が席につくと、後ろと横の男がチラチラと見ていた。杉山の席は廊下側とは逆でグラウンド側の一番後ろだった。

「では、授業を始めるから教科書の47ページを開いて。」

担任の声で生徒は授業モードに切り替わった。しかし、ユメの後ろと横の男、そして、ページをめくりながら昔の記憶を辿る杉山は除かれた。

「はじめまして。幸村ユメです。よろしく願いします。」黒いシヨートヘアの少女は左下を見ながら言った。D南小学校の3年3組

の生徒は転校生が来てもしつも通りうるさく、何度担任が注意しても騒いでいた。そんな中、杉山は目が少し悪かったが、その少女に黙って注目していた。不安そうな少女は今にも泣き出しそうになっていた。そんな時にふと、杉山と少女の目が合った。軽く杉山は笑った。微笑んだ杉山が少女を不安から引きずり出し、また少女も微笑した。

ユメの席は教室の真ん中より少し右の少し前の方だった。杉山は同じ列の一番後ろで、間には3人の子供が入っていて、ユメは見えなかった。なんとなく、杉山はユメが溶け込めるのか心配だった。それで、耳を澄まして会話が無いか聞いた。

「幸村さんって……」隣の席の女の子が声をかけて、一緒に笑い声も聞こえた。なんとなくの不安が洗い流されて杉山はホッとした。

それから騒がしいクラスメイトに迎えられたユメは、すぐにクラスの雰囲気溶け込んだ。

少し大人びた杉山よりもみんなと仲良くできているみたいだった。

「朝の自己紹介のとき嬉しかったよ。」昼休みに塾の予習をしていた杉山にユメが言った。

少し驚いた杉山はボーっとユメを見ていた。

「あ、うん。」満面の笑みのユメから目をそらして杉山は言った。ちゃんと顔がわかる距離で見るとユメの顔はすごく愛らしかった。

「みんな、私の話・聞いてくれてなかったから……。」

「このクラスって男も女もほとんどみんなうるさいから。」少し微笑んで杉山は言う。

「私が前にいた学校もうるさかったけど、こっちの方がすごいよ。」

「幸村さんってどこに住んでいたの？」えんぴつをクルクルさせながら杉山が言う。

「埼玉にいたんだよ。パパのお仕事でこっちに来たの。杉山君はど

ここに住んでるの？」

「僕の家は学校の坂をおりた所に郵便局があるんだけど、そこを右に曲がって少し行くと公園があるんだ。その公園を超えてすぐに左に曲がれば右側に僕の家。」

「え！？・・私の家はその公園を曲がらずにすこし行った所にあるマンションだよ！」嬉しそうに少し興奮してユメは言った。

【えーじゃあ、すごい近いね！そこなら走れば1分もかからないよ。】杉山も少し興奮気味に言った。

「じゃあさ、じゃあさ、一緒に帰らない？」ユメは後ろに手を組んで前かがみになった。

「・・・・・いいよ。」顔が近付いて、少し照れくさそうに杉山が言った。

「約束ね！」そう言っただけで満面の笑みでユメは外に遊びに行った。教室には顔が熱くなっていた杉山だけが残された。鉛筆が落ちて転がったが、気付かなかった。

午後の2時間の授業を終わらせ下校の時間になった。いつも郵便局まで一緒に帰る友達3人には用事があるから先に帰ると伝えて、教室の後ろ側の扉を見ると、ユメが手招きしていた。

2人で走って靴を履き替え、学校を出た所で止まった。

「みんな2人で帰ったって気づいたかな？」杉山が聞いた。

「わかんないけど、バレてたらちよつと恥ずかしいね。」ユメはペロっと舌を出した。

それを見て杉山はまた顔が熱くなった。

「杉山君、顔が赤いけど大丈夫？」舌を引っ込めてユメが1歩近づいた。

「走ったからだって・・・・・。」そう言っただけで顔を向いて杉山は歩きだした。慌ててユメも歩きだし、ゆっくりと並んで坂をくだった。

ゆっくり歩いていたはずなのに郵便局はすぐに左に消え、公園もすぐに見えてきた。

ユメの前の学校の事や3組のみんなの話をしていたらお互いの家はすぐそこまで来ていた。

もつと話をしたいし公園で遊んだりしたかったけど、杉山は塾があった。

2人はバイバイと言い合って家に帰り、杉山は塾に行ったが、目で見える文章は頭に入らなかった。明日は何を話そうかという考えが頭を巡り、家に帰ってもそれは続いた。

それから1ヶ月が過ぎた。夏の暑さも消えてきて、涼しい風が葉をオレンジや赤に染めていった。その1ヶ月の間は学校のある時は2人で学校を出るまで走って、出ればそこからゆっくり帰る日々だった。休みの日は友達の誘いを断ったりしながら公園で遊んだりした。突然の夕立ちで滑り台の下で暗くなるまで雨宿りをして、結局止まなくて、びしょ濡れになりながら帰った事もあった。遅くまで遊んで両親に怒られた事もあった。だけど、そうやって2人はどんどん仲良くなっていった。

この日も学校が終わり下校の時間が来て、いつも通り走って学校を出た瞬間にユメがつまづいて転んだ。左の掌だけ擦りむいていて、ちよつとだけユメは涙が出た。

「大丈夫？立てる？」痛そうに左手を見てユメを見て心配そうに杉山は言った。

「うん……。」「そう言つてユメが立とうとした時に目の前に杉山の左手があつた。

ユメはすごく嬉しそうに笑った。

「あ、でも杉山君・私がケガしたの左手だから、右手じゃないと痛くて掴めないよ……。」「そう言いながらユメは右手で杉山の左手を掴んで立ち上がった。

「あ、ごめん……。」「苦笑しながら杉山が言った。

そのまま手を握りなおしてユメが左、杉山が右側に立ってゆっくりと坂をくだっていった。

「痛い痛い飛んでけ〜！」そう言つて杉山はギュツと手を握つて笑つた。だけど、緊張している杉山はあんまり上手く笑えなかつた。それでも、ユメは痛くなくなつたとおどけて見せた。

もういちど杉山は笑つたが、今度はドキドキした鼓動がユメに聞こえていないか、不安になつた。でも、鼻歌を歌いながら、楽しそうに歩いているユメを横目に見て、不安を忘れて杉山も一緒に歌つた。この日の事は絶対に忘れないだろうなと、杉山は自分が握っているユメの手を見て思った。今日からもっとユメと仲良くやっていけるのだろうと・・・。

再会！小学生2！

翌日、杉山は学校に着いて教室に入ると、クラスの男子達が囲んだ。「お前、幸村と手繋いでたなあ。」ニヤニヤしながら1人が言った。

他の男子も同じように笑っていた。杉山は何も言わずにいた。

「最近一緒に遊ばなくなったと思ったたらラブラブだった訳か！」また違う男子が言う。

しまったなあ……。と杉山はただ俯いていた。

「ちよつと！やめなさいよ！幸村さん、泣いてるのよ！」このクラスで1番背の高い女子が大きな声で言った。杉山が登校する前にユメもからかわれていた。

「・・・う、うるさい！このノツポ女！」

「うるさいのはお前！こんな事して何が楽しいのよ！」

次にまた男子が何かを言い返そうとした時にチャイムが鳴った。このクラスにはめずらしく静かな1限目となった。

休み時間になっても杉山とユメは話をしなかった。いつもなら、みんなにバレない程度にでも少し喋ったりするのだが、ユメは全く元気がなく、他の女子数名と何かを小さく喋っているだけだった。朝の事で杉山も大きくショックを受けてはいたが、ユメの元気の無い姿を見る方が杉山は心が痛んだ。何か言葉をかけてあげたかったが、またからかわれるのではないかと杉山は怖くなっていた。

午前の授業が全て終わり、給食も食べ終えて、昼休みになった。女子は数名教室に残っていたが、男子は杉山以外は全員外へ行っていたので、ユメの所へ杉山は向かった。

「あ・・・さ・・・あいつらの・・・言う事、気にすんなよ。」ユメの横に立って杉山はそつと言った。

「・・・今日は一緒に帰りたくない・・・。」少し間があつて、涙

声でユメは言った。

「・・・わかった。」ユメの涙声に少し戸惑った杉山は他に何も言えずに自分の席に戻った。

杉山は自分以上にユメが傷ついたのだと思った。これ以上からかわれて、またユメが傷ついたら嫌だと思い、今日はもう話しかけずに帰ろうと決めた。

放課後になってユメは足早に教室を出て、帰って行った。ユメを心配していた女子3人が杉山の所へ来て、何かを話していたが、ユメの事が気になって何も聞こえなかった。

好きになった人が傷つくという事が、こんなに辛いとは思っていなかった。杉山はもう自分がからかわれた事など忘れていた。ユメが心配。ただそれだけだった。

わざと帰るのを遅らせて、確実にユメと出会わないと思えるまで待つてから杉山は学校を出た。

1人で帰る道がすごく寂しくて、杉山は少し泣いた。だけど、すぐにユメの事を想い、鼻水をすすって、涙をぬぐった。

公園が見えてきた。杉山に塾が無い日はいつも公園で遊んでいた。

「あああ、今日は塾が無い日なのにな・・・。」杉山は小さく呟いた。

溜息をついて公園の横を通りかかると、大きな木の後ろにユメがいた。杉山に手招きをしていた。杉山は驚いたが、辺りを見渡して、誰もいない事を確認してからユメの所へ向かった。

「一緒に帰りたくないって言うてごめんね・・・。」しゃがみ込んでユメは言った。

「いいよ！幸村さん・・・すごい辛かったみたいだし・・・。それにココで待つてくれたし！」杉山はニコニコ笑って言った。

「あのね、男の子に色々言われて恥ずかしくて、悲しくなって、もうこれ以上ね、からかわれなくなかったの。」

「うん・・・。わかってたよ。だから僕ね、帰るのを遅らせて帰っ

て来たんだよ。一緒にいる所をみんなに見られないように。」

「だからこんなに遅かったんだ。ありがとう！でもね、今日、帰り道がすごく寂しくていっぱい涙が出たんだよ。明日は一緒に帰ってもらってもいい？」

「・・・いいけど、また見つかったら何か言われるかもしれないよ？」

「うん・・・。いいの。そんな事より杉山君と仲良くしてたいもん。」ユメは笑って言った。

杉山はまた顔が熱くなるのを感じた。

「そっか・・・。僕もね今日帰り道寂しかったんだ。」照れながら杉山は言った。

それから2人はいつものようにブランコにのったりして公園で暗くなるまで遊んだ。

いつも通りに遊んだけど、いつもの何倍も杉山は楽しくて楽しくて仕方がなかった。

少しの時間だったけど、ユメを遠く感じて杉山はユメがいないとすごく寂しいと気付いた。

その事によって杉山はもっとユメと遊びたい、手を繋いでもっと歩きたいと思った。

心の中にユメがいっぱいになっていくのがわかった。嬉しいけど、少し恥ずかしいような気持ちだった。風呂に入っても想い続けた。

「大好きってこんな気持ちの事なのかなあ・・・？」そう言って、頭まで湯に潜ったりして長風呂になった。窓の外の月が、やさしくすべてを照らしているようだった。

朝、目覚めると遅刻ぎりぎりの時間だった。なんとなく興奮していたのか、杉山はなかなか寝付けず、いつもより1時間程眠りにつくのが遅れたからだった。

慌てて家を出て、走って学校へ向かった。杉山はいつも近所の子達

と余裕をもつて登校するので、このギリギリの時間に同じように慌てて走っているメンバーを見るのが初めてで、なんとなく新鮮な感じがした。チャイムが鳴る寸前に教室に駆け込みホッと安心してユメの方を見た。

元気ないいつもの笑顔でおはよう！と言ってくれと思っていたのにユメは俯いたまま杉山を見なかった。杉山が疑問を持った瞬間にチャイムが鳴って先生が入って来たので、杉山は自分の席に座った。また何か言われたのでは無いかと杉山の胸がざわついた。

「幸村さん・・・前に来なさい。」先生が唐突にユメを前に呼んだ。杉山は遅刻で動揺し、思いがけないユメの態度でさらに動揺していて状況がよくわからなかった。なぜ、ユメが先生に呼ばれたのかと考えるまでに少し時間がかかり、その間にユメは教卓の横まで行き、生徒の方へ振り返った。

「えー、突然ですが、幸村さんのお父さんが外国へ行く事になり、幸村さんはおばあさんの所で生活をする事になりました。ですので、幸村さんはこの学校から転校する事になりました。幸村さん、みんなに挨拶をしなさい。」先生がユメの背中をポンと叩いた。

杉山は理解出来なかった。ただ口が開いたまま動かなかった。数名がえー！と声を発していたが、他の生徒は何も言わなかった。

「・・・えっと、みなさん・・・短い間だったけど、仲良くしてくれてありがとう・・・。」ユメは涙声で、短い挨拶をゆっくりと言った。女子の数名が鼻をすすっていた。昨日からかっていた男子も何も言わない。

「みなさん、急ですが、今日で幸村さんは転校する事になりました。今日1日しっかりと幸村さんと仲良く遊んでくださいね。幸村さん、席に戻りなさい。」またポンと背中を叩いた。

なんで？どうして？こんなに仲良くなったのに・・・。杉山は涙をこらえられなかった。

席に戻るユメと目が合った。ユメも泣いていた。ずっと何も言わなかったのに・・・。転校なんてするって言わなか

ったのに！杉山は顔を上げられなかった。休み時間が来ても、辛さが勝ってユメに話しかけられなかった。

ユメも同じような気持ちでいて杉山の所へ行けず、他の生徒と喋るだけだった。

学校が終わり、下校の時間になって、みんなと喋っているユメを見ながら杉山は帰った。

辛くてユメに話しかけられず、前日よりもかなり多くの涙を流しながら坂を下った。

家に着いた杉山は何も言わずに部屋に閉じこもり、ベッドにもぐりこんだ。いくら流しても、涙は止まらなかった。太陽が沈みかけた時に、部屋の扉が叩かれた。

「雄ちゃん！ユメちゃんもうすぐ出発してしまうよ！」杉山の母が言った。

「・・・・・・・・。」

「ちよつと！入るよ！」そう言ってゆつくりと扉を開けた。

「雄ちゃん・・・・。仲良くしてた子が転校しちゃうのは寂しいと思うけどね、ユメちゃんのほうがずっと寂しいのよ？」そう母が言うのと、杉山は布団から顔を出した。

「どうして？」震える声で聞いた。

「ユメちゃんは、クラスのみんなとバイバイしないといけないでしょ？それに、お昼にユメちゃんのお父さんが挨拶に来てね、雄ちゃんとすごく仲良くしてもらったみたいでって言うてくれて、ユメちゃんも転校したくない！って泣いてたみたいなんだけどね、ユメちゃんのお母さんが病気になっちゃったみたいで入院しないといけないんだって。だからユメちゃんはお父さんともお母さんとも一緒に暮らせないんだよ？」優しく杉山に言った。

「だから雄ちゃんよりもずっとずっと寂し・・・・」続けて母が言っている時に杉山は走って部屋を出て裸足で家を出た。

ユメの家の前にトラックが止まっていた。そのトラックからエンジ

ンの音が聞こえた。

「幸村さーん！！！」杉山は出せる限界の大きさの声で叫んだ。すると助手席からユメが顔を出した。

「杉山くーん！！！」ユメも叫んだ。トラックは発車せずに待っていてくれた。

「ごめんね……。僕なんかより、幸村さんの方がずっと、ずっと寂しいのに、泣いてサヨナラも言わずに帰っちゃって……。」また大粒の涙が流れた。

「ううん……。ユメも杉山君にずっと言えなかったし……。今日の朝まで、転校なんてしないんだって思ってたの……。誰にも言わないと、このままここで暮らせるかもしれないっておもってた……。……。パパと……。ママと一緒にいられるんだって……。杉山君とも……。」ユメは声を出して泣いた。

「また、いつか会えるよね？僕……。ずっと……。幸村さんを好きで……。好きでいる……。いるから。」声を絞り出して言った。「……。うん！嬉しい。」目を真っ赤にしながらユメは口だけ笑った。しかし、すぐに崩れてまた泣いた。

2人は手を繋いだ。助手席のユメはかなり高い位置にいて、杉山の手にはユメの涙が落ちた。

「ユメ、もう行かなくちゃいけないよ。」ユメの父親が静かに言った。

「杉山君……。ユメと仲良くしてくれてありがとうね。いつも、家で杉山君の話ばかりしていたんだよ。」続けて父親は言った。

「うん。」杉山は小さくうなずいて言った。

「バイバイ！元気でね！」杉山がそう言っただけで手が離れるとゆっくりとトラックは走りだした。

並んで杉山は全力で走った。

「バイバイ！バイバイ！バイバイ！」杉山は走って、ユメは身を乗り出して言い合った。次第にゆっくりと杉山は離されていった。30メートルくらい離されて、トラックが右に曲がるうとした

時に、杉山は唾を飲み込んで思いきり息を吸い込んだ。

「ユメちゃー！ーん！！」真っ赤になった目を閉じて思いきり叫んだ。トラックは見えなくなった。その場に座り込んで杉山はただただ泣いた。

彼氏彼女く中学生

杉山の頭に激痛が走った気がした。ハツとして顔を上げると担任がこつちを見ていた。

「俺の授業で早々と寝るな！」クラスのみんなが笑った。

杉山の足もとにチヨークがあった。これを当てられたのかと、チヨークを拾い上げようとした時に頭に激痛が走った。

「痛っ！」思わず声が出て顔を上げると担任が杉山を見ていた。黙ったまま担任は新しいチヨークを取り出し黒板に文字を書いていった。数名が笑っている。

杉山はユメとの昔の事を思い出している間に寝てしまい、その思い出の最後を迎えた瞬間に思考は睡眠になりチヨークを当てられる夢を見てしまっていた。

「正夢だ・・・。」杉山はつぶやいた。夢と現実で2回杉山はチヨークを当てられた。

なかなか経験なんて出来ないであろう正夢をこのようくだらない事で経験してしまうなんて勿体無いと杉山は苦笑した。ふと、ユメを思い出し、ユメの方を見ると目が合ったがすぐに杉山からそらされた。杉山には意味が解らなかった。授業中なので何も言えず、頭を少し掻いて、窓の外をボーっと見た。太陽はいつも通り、太陽から見える所は全部照らしていた。好き嫌いなく、太陽は偉いなあ。と杉山はぼんやりと思った。

杉山は中学に入ってからすぐに恋をした。ユメの事を忘れてはいなかったが、この年代によくある、年上へのあこがれからだった。3年生の上級生に一目惚れだった。

杉山は塾に通っていたが結局は近所の中学校へそのまま入学した。勉強より遊ぶ方が勝ってしまった。杉山は特別カッコいいという容姿では無かったが、3年生の石井佳織は案外すんなりと杉山を

受け入れてくれた。同年代よりも大人びていた杉山はあまり頼るという事をしてこなかったが、杉山よりも大人な佳織に杉山は甘える喜びを知った。

次第にそのあたかさに包まれる心地よさにユメへの思いは追いやられ思い出す回数も減っていった。

そんな幸せな時間も佳織の卒業と高校入学によって杉山から剥奪された。

佳織が中学生の時は毎日のように会っていたが、当然、会う回数は減った。

その事が、もう甘える事が当たり前になっていた杉山には不満で、何度か会うたびにストレスから喧嘩になったりしていた。そして、佳織は杉山に疲れたと言い、別れる事になった。

数ヶ月後に杉山の耳に入った噂では、佳織は年上の彼氏が出来たという事だった。

その噂を聞いて佳織に甘えすぎて、自分の事ばかりしか考えて来なかったからだと反省した。

初めて彼氏、彼女としての形式で育まれた恋愛はこのようにして始まり終わった。

それから、中学時代に杉山は2度告白された。1人は同級生で、もう1人は1つ下の下級生だった。2年生の時に同級生の宮間沙耶に放課後呼び出された。

「あの・・・、杉山君の雰囲気がかっこいいなって思って、だんだん好きになってしまつて・・・。」少し上目使いで沙耶は杉山に言った。

「ごめん・・・。」杉山は即答した。雰囲気ってなんなんだ？そしてその上目使いが気持ち悪いと一瞬で杉山は思った。学校中では可愛いなどと言われていた子だったが、それを知った上でのぶりっ子な感じが杉山にはどうしても、受け入れられなかった。

この告白は学校中で話題となった。クラスの女子や会った事もない

女子からフツた理由を問いただされ、沙耶が可哀相だの色々言われた。杉山は本当に鬱陶しかったが耐えた。

『杉宮事件』などと下らないネーミングがつけられたが、2週間程で話題も終わった。

下級生の方の告白は杉山が3年生の時だった。この時も放課後で、ひと気のない廊下呼び出された。

林加奈という子だった。この子もかわいらしい感じで、背の小さい子だった。

「杉山先輩・・・急ですみません・・・。何度か廊下とかですれ違う度にだんだんあこがれの先輩になっていつて、気が付いたら好きになつていました。よかつたら付き合ってくれませんか？」加奈も上目使いで言つたが、明らかに背が低かつたので仕方ないかと杉山は思つた。

「ごめん・・・。僕は今は受験勉強に集中したいし、君の事はよく知らない。そう言つてくれて嬉しいけど、付き合つたりは出来ない。」「この言葉も杉山はわりと早めに言つた。

「・・・わかりました。忙しい時にすみませんでした。受験頑張つて下さい。失礼します。」「言いだすまでに時間をかけて、俯き加減で加奈は言つて振り返り2、3歩進んだ。そこでもう1度振り返つた。

「あの・・・、恥ずかしいんで今日の事は内緒にしてもらえないですか？」少し赤くなつた目で杉山を見て言つた。

「最初から、誰にも言うつつもりはなかつたよ。」「少し微笑んで杉山は言つた。

「・・・ありがとうございます。」「加奈は笑つたが下手な笑顔で、唇をギュツと締めてまた振り返り歩いて行つた。

この告白は杉山も加奈も誰にも言わなかつたので学校に広まる事は無かつた。

杉山は佳織に振られてから恋愛には慎重になつていた。そこに沙耶の告白騒動があり、無意識に憶病になり、さらに慎重になつていた。

告白で付き合うのも付き合わないのも個人の自由のはずなのに、なぜ全くの他人が外から文句を言ってくるのか理解できないし、理解したくも無かった。杉山は自分から好きになって、そしてしばらく友達として過ごし、ある程度、どのような人なのかわからないと恋愛の対象にはしなかった。

それから中学卒業までは恋愛も無く、周りと同じように受験勉強に励んだ。

遊びや恋愛に少し傾いていた杉山がもう一度勉強に熱を入れるのは難しかったが、このままではいけないと何度も自分に言い聞かして、それなりの成績が取れるまでになった。

この頃にはユメの事はすっかり忘れていて、記憶の隅から出て来る事は無かった。

親との関係も微妙にギクシャクし出して、何を言われてもうんざりしたり、今まで何とも思わなかった友達の言動にイライラしたりしていた。だが、そんな期間も長くは無く、受験が終わると元通りになり、解放感から、またよく遊ぶようになり皆に流されかけたが、また勉強が大変になると思い直し、勉強と遊びの比率を考えて卒業まで過ごした。

キス〜高校生〜

杉山は高校に入学した。特にやりたい事も無く、クラスメイトとはそれなりに仲良くなり、最高とは言えないが、満足な高校生活を送っていた。

季節は徐々に夏へ変わろうとしている時に杉山はある1人の子に小さな恋心を抱いた。

名前は鈴原茜といい、テニス部に所属する活発な女の子だった。たまたま席が隣になった時によく喋ったり、寝てしまった授業のノートを見せてくれたりして、接しやすい、いい子だなと杉山は思い、そんな些細な事が嬉しかった。放課後にはやる事の無かった杉山はテニス部の練習を観に行く事も多々あった。フェンス越しに見ているだけでもなんとなく杉山は楽しかった。何度か観にいった暑い快晴の日に茜は杉山を見つけフェンスに近寄った。

「最近観に来てるよね？テニスに興味があるなら入部してみない？」汗を拭きながら茜は言った。

「え？いいよ……。俺、体育くらいでしか運動してないし、その体育だつてそんなに真剣じゃないから、全く動けないよ。」苦笑しながら言った。

「そっか……。結構ハードだから無理にとは言わないけど、楽しから、気が向いたらやってみてね！」そう言つて茜はコートの方へ戻つて行つた。その後ろ姿をボーッと杉山は見つめていた。本当にこういう少しの会話が杉山には嬉しくてたまらなかった。

それから2人は教室で喋ったりしながらどんどん仲を深めていった。杉山の小さな恋心はもう小さくは無く、杉山自身も無視出来ないほどに膨れ上がっていた。

そして7月も半ばを過ぎ、夏休みの直前に、杉山は茜に告白をした。「鈴原さん、俺・・・君を好きになつたんだ。付き合つて・・・くれな
いかな？」

「あはは・・・いいよ。」笑って茜は言った。

「やった！だけど、どうして笑ったの？」照れ笑いの杉山が言った。
「だって、いつも真剣な顔なんてしないのに、今は真剣な顔だったからなんか可笑しくて・・・。」そう言ってまたクスクスと茜は笑った。

「あのなあ、俺は告白でまでふざけるような男じゃないんだよ。」笑って言う。

「でも、よかった。OKしてくれて。振られてたら明日が気まずかったかも。」続けて杉山は言った。

「私もね、杉山君が気になってたんだよ。席が隣同士になってから。」

「俺も同じ時から気になりだしたんだ。もう夕暮れだし帰ろっか。」
2人とも電車通学だった。駅まで一緒に歩いて帰った。

翌日、2人の関係の事はクラス中に広まった。恋バナが大好きな年頃の集まりで、茜も杉山も隠すつもりは無かったし、みんなも笑顔で祝福してくれていた。

それからすぐに夏休みに入った。デート代を稼ぎたい杉山はファミレスでアルバイトを始めた。要領のいい杉山はすぐに慣れ、テキパキと仕事をこなせるようになり、夏休みを有効に使えた。アルバイトの無い日や、早く終わった日などは、茜の練習を観にいたり、自主練の相手をしたりした。初めは全く出来なかった杉山だったが、徐々に慣れはじめて、簡単になら打ち合えるくらいにまで成長した。テニスをやりあうのも大切なデートの時間だった。

たまには映画でも観にいくと、巷で話題になっていた映画を観にいたりした。

自然と手を繋いで歩くようになり夏休みの間だけで、2人の関係はどんどん親密になっていった。

夏休みの終わりに2人は電車で行く事にした。それ程遠い距離

ではなく、1時間くらいで海水浴場に着いた。しかし突然の雨に2人は海に入る事無く、雨宿りをする事になってしまった。

「ああ。折角ここまで来たのに。天気予報の嘘つき！」ムツとした顔で杉山は空に言った。

「ホントだよね……。天気予報は晴れて言ってたもんね。」

海の家は2つあり、杉山達のいる方はもうただの空き家のようになっていた。

もう1つの海の家は結構な人数で賑わっていた。

「俺、何か買ってこようか？食べたい物とかある？」賑わいを見て杉山は言った。

「ううん。いらないよ。今、海でこれだけの人がいるのに、ここには私たちがいないんだよ？ここは2人だけの場所なんだよ。海もすっかり見えるし。なんか嬉しいね。」茜はそう言っていると体育座りをして、静かに波の音を聞いた。

その時に、杉山は久々に自分の鼓動を聞いた。明らかに茜を意識している事が解る。

顔も熱いし、落ち着きが無い感じも杉山は自分で気づいていた。

自分の鼓動が茜に聞こえてしまわないか、杉山は不安だったが、ピタリと寄り添うように座り、海の方を見た。肩に手を回そうかとも考えたが、自分がそうしている姿を想像して、客観的に見て気持ち悪かった。妙な所だけ杉山は冷静だった。

少しすると、茜の視線に気づき、そちらを見た。ハツとした感じだったので、首を回すスピードが速く、2人の顔がかなり近づいた。お互い少し驚いた感じになったが、茜の今までに見た事のない顔を見て杉山は決めた。言葉はいらなかった。本当に一瞬だけ唇が触れ合った。

「もう1回。」杉山はそつと言ってもう1度キスをした。それは1度目より少しだけ長く、1度目より少しだけ強く触れ合った。杉山は初めてにしては上手く出来たと勝手に思っていた。

それからはチャンスがあれば会うたびにキスをした。だんだん2人

とも慣れてきて、深いキスになっていった。

秋が過ぎ、冬になり、時はどんどん過ぎていき、ゆつたりとしていた2人の愛も気がつけばもうすぐ半年になるうとしていた。

「私ね、エッチって怖いんだ。」2人で学校の帰り道を歩いていると、突然茜が言った。

「え・・うん。俺は、茜の心の準備が出来るまでは待つから。」杉山は、日頃の茜の態度からなんとなくだが気づいていた。

「ごめんね。勇気が出なくて。友達とかは、もう経験とかした子いるんだけど、話を聞いてもなんか怖いんだ。」

「俺は茜を大切にしたいから。怖いのに無理にやりたいなんて思っていないから。」

茜は頷いて黙った。少し沈黙があつたが、杉山が、違う話題を持ちかけ、また会話が弾んで、笑いながら帰った。

そして、何事もなく2人は2年生になった。違うクラスになってしまったが、2人の恋愛は上手くいっていた。喧嘩らしい喧嘩もする事は無かった。杉山はずっとこのまま幸せでいたいと思うようになっていった。そんな時にユメが杉山のクラスにやってきたのだった。

茜とユメの会話

チャイムが鳴り、授業から休憩の時間に変わった。

杉山はユメに言いたい事や聞きたい事があつたが、うまく整理出来ていなかった。

それでも杉山はユメの席の方へ歩いて行つた。

「幸む・・・」杉山がユメの名を呼ぼうとした時に後ろから肩を叩かれた。

「杉山、愛しのハニーが呼んでるぜ！」大げさにウインクしながらクラスの男が言つた。

「加藤・・・。お前、言葉も仕草も古いよ。」杉山は苦笑いで、加藤の親指が差す方へ向かつた。

「あ、杉山君。あのね、今日はテニスが終わつたら、テニス部の友達に買い物に誘われてて、どうしても付き合わないといけないみたいで・・・だから今日は先に帰つてて。」茜は少し落ち着かない感じで言つた。

「ああ。わかつたよ。気をつけて行くんだよ。」そう言つて杉山は少し笑つた。

「じゃあ、私、次は移動授業だから。」すぐ近くの階段を茜は上がつていった。

話が終つて、教室に入り、ユメの方へ行こうとすると、ユメの席の辺りで男女の人だかりがあつた。かなり盛り上がっているようで、杉山は短い溜息をついて自分の席に戻つた。

この光景は休憩時間にはずっと続いた。途切れ途切れに聞こえてくる会話は、内容まではわからなかったが、男子生徒のテンションが高いのはわかつた。ユメを取り囲む人の隙間から、たまにユメが見えたが、小学生の時の面影を残しつつ、本当に可愛くなつていた。

放課後になり、杉山はテニスの練習を観にいった。これはもう日課

になっていて、意識をしなくても、杉山の足はテニスコートに向くようになっていた。しばらく遠目から茜を見ていたが、休憩になったらしく杉山からは見えない所へ行ってしまった。

そこで杉山は、今日は一人で帰らなければならぬ事を思い出し、正門の方へ歩き出した。

すると、ちょうど校舎からユメが出てきた。授業が終わってからしばらく時間が経過していたので、騒いでいたクラスメイトは部活か帰宅したらしく、誰も周りにいなかった。

「幸村さん。」小走りに駆け寄り、杉山は言った。

名前を呼ばれると思っていなかったらしく、ユメは少し驚いたように振り返った。

一瞬何かを考えたようだったが、すぐにユメはさっきの倍くらいの驚きの表情に変わった。

「杉山君・・・？」まじまじと杉山の顔を見ながらユメは言った。

「うん。今日からここに来たんだよね。同じクラスなんだけど。」

ユメの驚きの表情を見て、杉山から緊張感は無くなっていた。

「え！？そうなの？どうして声をかけてくれなかったの？」

「あの人だかりとあの盛り上がりで声をかけるチャンスが無かったんだよ。」微笑みながら杉山は言う。

「あはは。確かにすごい騒いでたよね。でも、楽しい人達ばかりでよかった。」

「まさか、また会えるとは思って無かったよ。しかも小学校の時と同じような感じでだろ？偶然ってすごいな。」感心するように杉山は言った。

「ホントだね。学校だけじゃなく、クラスも同じだもんね。どれくらいの確率なんだろうね？」

「考えられないくらいの数字が並ぶよ。きっと。あ、そういえばどこに住んでるの？」

「昔と同じ所だよ。今日から住むんだ。もし、まだ杉山君が住んでたら驚かそうと思ってたんだよ。」舌をペロツと出しながらユメは

いたずらに笑った。それを見て杉山は、昔、ユメが舌を出して笑う癖があつた事を思い出した。変わつてないんだなと、杉山は思った。「そういえばさ、なんでまたこつちに帰つて来たの？お祖母ちゃんの所は埼玉だつたよね？確か。」ふと浮かんだ疑問だつた。

「あ・・えつと・・お父さんがね、日本に帰つて来る事になつたんだけど、こつちの方でしか出来ない仕事があるんだつて。それで、お祖母ちゃんも、もう大変そうだったから、私もこつちに来る事になつたの。」

「へええ。そうなんだ。よかったね。また一緒に暮らせるんだね。」杉山も嬉しかった。

「だけどね・・・。もうお母さんがいないの。私が転校して、しばらくして死んじゃつた。」俯いてユメが言つた。

「・・・そつか・・・。幸村さんが転校する時に入院するつて、うちの母さんが言つてた。」

「うん・・・。でも、お父さんがいるから寂しくないんだよ。」ユメは寂しそうに笑つた。

それからしばらく歩き駅に着いて、電車に乗り、電車では最近のドラマや映画の話をして、2人で盛り上がった。下車する駅はあつと言つ間にやつてきて、2人で降りた。

「あ、杉山君。わたし、ちょっと行きたい所があるから、ちょっと行つてくるね。いっぱい話せて楽しかつたよ。また喋ろうね。」そう言つて、ユメは自宅とは反対方向に歩いて行つた。

どこに行くのだろうかと杉山は疑問に思ったが、知る必要もないかと、のんびり家まで歩いた。いつもより、かなり早い帰宅だつた。

「何をしよう・・・。」予定外に時間が余つても有効に使えない性格の杉山はただボーっとしながら、茜とユメの事を交互に考えていた。

茜とユメの告白1

翌日、杉山は学校に着いて、レモンティーを飲んでいた。いつもはミルクティーを飲んでいるのだが、この日は売り切れていた。たまにはレモンティーもいいかと、購買で買ってきたのだった。なんとなく携帯を触っていると、加藤と石橋に声をかけられた。

「なあ、杉山。聞いてくれよ。こいつさ、幸村を好きになったとか言っただぜ。」加藤が、石橋と杉山を交互に見ながら言った。

「えー!?」おもわず、杉山は大きな声を出してしまった。

「ちよつ!ちよつと!」慌てて石橋が杉山の口をふさごうとした。それを杉山は上手くかわし、姿勢を前のめりに変えて、レモンティーを少し飲んだ。

「本気で言ってるの?」眉間に少し皺を寄せて杉山は石橋を見て言った。

「・・・おう。・・・一目惚れしちゃったんだよ。」小さな声で石橋は言った。

「俺は、無理だつて言ってるんだぜ?絶対モテモテだつて。誰が見ても可愛いだろ。」加藤は杉山の机に両肘をついてしゃがんで言った。それにつられて、石橋も加藤の横で似たポーズをとった。

「カッコいい男でなきゃ、つりあわねえつて。万が一付き合えたとしても、みんなに笑われるだけだぜ?」加藤は続けてビシビシ言う。

「なあ、杉山はどう思う?」石橋は加藤を無視して言った。

「え?うーん。幸村さんが、どんな人がタイプかわからないから、なんとも言えないけど。」頭の後ろに手を組んで杉山は答えた。

「そもそもさ、どうして俺にこういう話をするの?」杉山は続けた。「俺達と仲のいいやつで、彼女がいるのは杉山だけだからな。やっぱり、女心みたいなやつを1番理解してるだろうだからさ。」加藤が言う。

「はは。そんな単純じゃないだろ。女心って言っても1人1人心は

違うんだから。茜の事なら少しはわかるけど、幸村さんの事は俺にはわからないよ。」

杉山が言い終わると同時にチャイムが鳴り、2人は自分の席へと戻って行った。

今は茜が彼女の杉山はユメと昔仲が良かったなんて話をしてしまえば、噂や誤解を招いてしまうと思い、誰にも言わない事にした。

休憩時間になり、杉山が伸びをしていると、加藤と石橋がやってきた。

「どうすればいいんだろう？」石橋は小さく呟くように言った。

その言葉を聞きながら杉山はチラッとユメの方を見た。相変わらず数名の男女に囲まれていた。明らかに話しかけられる雰囲気では無かった。その時ふと、茜が頭に浮かんだ。

杉山と茜はそんなに多く喋るような感じでは無かった。2人とも、仲がいい友達がいたので、用事が無い限りは喋る事は少なかった。家に帰ればメールのやりとりもあったが、メールを打つのが面倒な杉山は返信がかなり遅く、回数は少なかった。だから、放課後に一緒に帰る時が1番親密になる時だった。学校では携帯を使う事は少なかった。

「うじうじ悩むくらいなら告白すればいいんじゃない？」加藤が言った。

「え？振られたらショックだよ俺！」あたふたという言葉がピツタリな動きをして石橋が言う。

「お前、遠くから見てるだけで幸せなんて言うなよ？」石橋の慌てぶりをみて笑いながら加藤が言う。

「そうは言わないけど、まだまだ同じクラスでこれからも過ごすんだから、気まづくなるじゃん。」

「お前、フられる事前前提で言うんじゃないよ。男見せろよ！」右手をグッと握って加藤が言う。

「加藤が、無理だって言ってたんだろ？無茶苦茶言うなよな。ひと

事だと思つて……。」「俯きながら目を閉じて力なく石橋が言つた。
「なあ。杉山はどう思う?」「ハツと気づいたように石橋が言つた。
「どうつて言われてもなあ……。うーん。告白……。したほうが
いいんじゃない?」「全く石橋の方を見ずに言つた。杉山にはこう言
うしか思いつかなかつた。

「だろ? やつぱりな。恋愛先生の杉山が言つてるんだから告白しろ
よ。」「加藤は石橋を告白側へ流そうと必死だつた。

「ちよつと、考えさせて。」「そう言つて石橋は席に戻つて行つた。
それから2時間休憩時間があつても石橋は席を立たなかつた。3限
が終わつた時に杉山の所へ石橋が来た。それを見て慌てて加藤もや
つてきた。

「悩んだんだけど、俺、告白する! 2人が言うんだからするよ!」
迷いを断ち切つた目で強く言つた。少し杉山は戸惑つた表情になつ
たが、表面的には応援しているフリをした。茜がいるのに、杉山は
複雑な心境だつた。ユメに告白は断つて欲しいと思つてしまつてい
た。説明の出来ない感情が杉山の心にあつた。

放課後になつて、石橋は帰り際に、加藤と杉山を呼び、明日の放課
後に告白すると言つた。

「しつかり言う事を考えて来るよ! じゃ!」窮屈な笑顔を2人に見
せ、石橋は歸つて行つた。

「たぶん無理だろうな。」「石橋の出で行つた出入口を見ながら加
藤は言つた。杉山は何も言わずに机に座り足をブラブラさせていた。
「あ。」「そいつって杉山は加藤を残し、テニスコートへ向かつた。
教室にはもうユメは居なくなつていた。

茜とユメの告白2

石橋は明らかに寝不足の顔で登校してきた。目の下のクマも、いつもと何か違う顔色も、昨夜の戦いを象徴していた。

「なあ、杉山……。あいつ、やばくないか？」加藤が石橋を見ながら言った。

「うん……。」昨日の段階で自分の気持ちを整理出来ていなかった杉山をさらにかき乱す出来事だった。2人は駆け寄った。

「おい。お前そんなになるくらい言葉を考えたのか？」加藤が言う。
「……。いや。」首を横に振り、ゆっくり石橋は答えた。

「じゃあ、どうしてそんな顔なんだよ？」

「家に帰ってから、リラックスした環境で考えようとして、夕食を早く食べて、風呂も入って完璧にしたんだ。そして、夜の10時くらいにはもう言う事は出来てたんだよ。」重そうな臉をこすりながら石橋は小さな声で言った。

「でも、お前明らかに寝不足な顔じゃん。」

「……シミュレーションをしてたんだ。どんな感じで言おうとか、こう言われたら、こう切り返そうとか。そしたら、2時になって、やばいと思って寝ようとしたんだけど、全然寝付けなくて、遠足の前の日みたいになっちゃって、4時くらいにやっと寝れたんだ。」気持ち悪い笑顔で石橋は言った。

「はは……。」加藤は少しだけ笑ったが、石橋を見ていたら笑えなくなかった。

「もうさ、今日の授業は全部寝れば？その顔じゃ、誰でもOKしてくれないぞ。」

「うん。そうする。また、授業のノートみせてね。」そう言って石橋は机に体を預けた。

それから石橋はほとんどの授業を眠って過ごした。杉山達は休憩時

間の度に告白の仕方や場所などを予想する話をした。ユメは相変わらずいつも通りでみんなと笑っていた。

杉山は自分の気持ちが迷路から出られないのだと感じ、複雑な気持ちに蓋をするように努めた。しかし、ユメが視界に入る度に、笑い声が聞こえてくる度に、その蓋は容易く外されてしまった。仲のいい友達の告白というシチュエーションが杉山には辛かった。

学校では珍しく、杉山は茜にメールを送った。今日は友達が告白をするから、それを見守る為に一緒に帰れないかもという内容で、最後に、それが誰だとかは聞かないでくれと書いた。

すぐにわかったというメールが届き、杉山は早く終わればテニスコートに行くと返信した。

最後の授業まで石橋は眠り、顔はいつも通りくらいまで回復していた。

チャイムが鳴り、みんなが、教室を出て行く。ユメもカバンを持っていた。その時に石橋はユメに近づいた。

「あの、幸村・・・さん・・・。ちょっと・・・話したい事があるんだけど、い・・・いいかな？」

「ん？いいけど・・・何？」キョトンとした顔で石橋を見ていた。

「まあまあ・・・。座って。」そう言って石橋はユメを席に座らせ、少し辺りを歩いた。

みんなが、教室から出ていくのを待っていた。それに気付いた杉山たちは教室を出て、廊下に座って、静かに待った。

「教室か・・・。」加藤は呟いた。体育館裏や、校舎裏を杉山達は予想していた。

石橋はユメの前に座った。背もたれを体の前側にくるように座り、その背もたれに両手を乗せる姿勢をとった。

「あの・・・。俺・・・君と初めて会った時に、好きになっちゃったんだ。」首筋を触りながら、キョロキョロ辺りを見ていた。全く石橋は落ち着きが無かった。

少し沈黙。

「短っ！」ちいさな声で加藤が言った。考え、シミュレーションをし、寝不足になったとは思えないセリフの短さだった。

「えっと、あの、私ね、好きな・人がいるんだ。だから、ごめん・」ユメは小さな声で言った。その声は優しく、やわらかな太陽の光に照らされたユメは本当に可愛く、少し石橋は見とれてしまっていた。

「あ・ごめん・」あ、ありがとう、聞いてくれて。」ボーツとしていた自分に気付き、石橋は言った。石橋の告白はすぐに終わった。

その声を聞いて、もう出てくると察知し、杉山達は柱の陰に隠れた。教室の後ろ側の扉が開き、バイバイという言葉が交わされて、ユメが出てきた。2人には気付かず歩いて行った。ユメが見えなくなると杉山達は教室に入った。

石橋は窓の外を見ていた。
「石橋・」加藤が呼んだ。すると、石橋はグツと伸びをして大きく溜息をついた。

「あー、ダメだった・」わかってたけど、考えてた言葉が全部飛んでしまつてさ、殆ど、何も言えなかった・」ああ。せめて全部言いたかったなあ。緊張しちゃったなあ。」

頭の上で手を組んで言った。

何ともいえない空気が漂い、杉山達は言葉を発せなかった。

「でも・」本当に可愛かった。2人は見れてないと思うけど、ごめんって幸村さんがいった時の顔がすげー可愛かった。」沈黙を石橋が破る。

「ああ。可愛かったなあ・」石橋は続けて言ったが、もう涙声だった。またしばらく沈黙した。さっきよりも少し長かった。

「ごめん、なんか・泣いちゃったなあ。もう・帰ろう帰ろう。」振り返って袖で涙を拭いて、石橋は笑った。中途半端な笑顔だったが、杉山達が今まで見た中で1番カッコいいと思える石橋だった。

「よし！カラオケでも行こう！な！」加藤は駆け寄り、石橋の肩に腕を回して言った。

3人は駅へ向かって歩いた。加藤は石橋を元気付けようと、セリフが短かすぎだとか、また好きな子が出来るなどと言って励ました。杉山は茜にメールを送った。フられてしまったから、慰めるために一緒に先に帰るという内容だった。携帯をカバンに入れて少し歩いて杉山は、ユメが言った好きな人は誰だろうと考えていた。本当にいるのか、それとも、告白を断るための口実なのか。杉山は少し思案したが、すぐに考えても解るはずがないなと思いつめた。とにかく今は石橋の方が大事だと。少し後ろを歩いていた杉山は2人の方へ駆け寄った。

遊園地くミラクル

石橋がフられた事は秘密となり、4人だけしか知らなかった。茜は約束通り詮索はせず、残念だったね。と杉山にメールを送っただけだった。当の石橋は長い片思いからの決死の告白では無かった為か、それ程ダメージを受けていたわけではなく、2日もすれば何も変わっていない石橋に戻っていた。それでも、念のためにと杉山達は、それから3日くらいは様子を見る事になった。石橋はそんな2人に気付き、気にしないでくれ等と言ったが、友達がフられるという経験が無かった2人はどうしていいか分からず、なんとなく落ち着きのない時期になってしまった。石橋よりも2人の方が正常になるのに時間がかかってしまった。必要以上に気遣いをしてしまう性格だった。

それから2週間が経ち、5月の連休に、杉山は茜と遊園地に行く事にした。前日に茜は試合があつたが、久々の遊園地とあつて、テンションが高かった。

杉山は絶叫系が苦手だった。昔から事あるごとに、わざわざ怖い思いをするなんて馬鹿げてる！と言い、友達に怖がりだのビビリマンだのと言われても、絶対に乗らなかつた。

「ねえねえ、超ミラクル大回転に乗らない？」ニコニコと茜は溢れそうな笑みで言った。

「・・・俺はいいよ。遠慮しておくよ。」ジェットコースターを見て、笑顔をひきつらせて言った。杉山が今まで断ってきた物とは次元が違うものに見えた。下から見てるだけで気持ちが悪くなりそうだった。

「ええ！？あれに乗る為に来たんじゃないの？もしかして、こういうの怖いのか？」

「い・・・いや。怖くは無いんだけど、こういう系の乗り物から楽

しみを見出せないというか、乗ろうと思わないからさ。」杉山は無理やり笑ったが、自分でも上手く笑えたかわからなかった。

「乗ってみようよ！乗れば、楽しさを見出せるかもしれないからね！」

「あ、ちよつ！」

グイグイと杉山の腕を引っ張って超ミラクル大回転に向かっていく。かなりの長蛇の列が出来ていて、その一番後ろに並んだが、すぐに後ろに列が伸びていった。断って逃げる事も出来たが、彼女と初めての遊園地でカッコ悪いのは嫌だと思い覚悟して並んだ。それからしばらく歩いてから、階段をのぼり始めた。徐々に上がっていく階段。遊園地を全て見るんじゃないかと思えるほど登った。何度も何度もコースターは発着を繰り返し、その数だけ大きな悲鳴が聞こえてきた。たまに茜が杉山に話しかけたが、適当な相槌を杉山は繰り返すだけだった。

なぜ、はじめに乗る乗り物がこれなのか。お化け屋敷やコーヒーカップ等の、恋人同士を楽しませるような物があるにもかかわらず、なぜ、ココにいるのだろうとそればかりを杉山は考え、100%後悔していた。順番は次だ。もう目の前に超ミラクル大回転が来る。ミラクルが起こって、気が付けば地面に立っているという事は無いだろうかと僅かに杉山は考えたが、あっさりと、順番が回ってきた。ミラクルは微塵も可能性を見せなかった。

前から順番に座っていき、2人は3列目に乗り込んだ。レバーが下り、カタカタカタと斜め上に上がっていく。ものすごい高さになった。茜も喋らなくなり、表情が硬くなっていた。

「ネーミングの意味がわからないよね……。」並び始めてから、杉山が初めて喋った。

「え？」表情を変えずに茜は横を見た。

「超ミラクル大回転って、何がミラ……」杉山が極度の恐怖の中、無理に茜を気遣って喋っている途中に角度が変わった。前の人と空しか見えなかったのに、その視界の中に突如、遠くのビルが見えた。

さらに角度は変わった。え？と杉山が思った瞬間に何のためらいも無く落ちた。

「何がミラクルなんだー！！」杉山は叫んだ。猛スピードで走り、グルグル回転をする。文字通りの大回転だった。何が何だかわからない。上を向いているのか、右なのか左なのか。茜はキヤーキヤーと悲鳴をあげていたが、杉山は初めの叫び以外は無言だった。杉山が初めて乗った絶叫系の乗り物は、こういった乗り物が得意な人間でも恐怖に陥るほどの物だった。ものすごい数を大回転し、ついに最後の直線になり、ゆつくりとゴールに着いた。レバーが上がり、みんな乗物から出た。乗客は口々に、怖かったあの、震えてるだのと言った。茜の手を持ちながらボーツと放心状態の杉山も出て、階段をゆつくりと降りた。

「怖かった」。杉山君は楽しかった？「少し出た涙を拭きながら茜は言った。

「・・・」。杉山は何も言わずに、何も無い空間を見ていた。

「杉山くん？」茜が顔を覗き込んだ。

「あ。」杉山の目の焦点が合った。同時に茜とも目が合った。

「ミラクルだ。」気が付けば地面に立っていた。

遊園地へ観覧車へ

杉山は完全に弱っていた。茜もかなりの恐怖を味わったはずだったが、すぐに元通りの元気さに戻り、テンションはどんどん上がっていた。

「ねえ、次はあっちのジェットコースターにしない？」いたずらに微笑みながら茜は言った。

「・・・え？」杉山は力無く聞き、茜の指さす方を見た。

恐怖レベルは遥かに劣るであろうが、絶叫系に変わりはない。杉山は意地を張るのも忘れて、低い声で断った。ベンチにずっと座っていたかった。

「やっぱり、怖かったんだねえ。」茜は小さなため息を繰り返す杉山を見ながら言った。

「人生で初めて、あーという系の乗り物に乗ったよ。」前を向いたまま杉山は言う。

「ええ！？初めてがミラクル大回転！？ありえないよー！」目を大きく開いて茜は言う。

何がありえないんだろう？杉山は思っていたがわざわざ言える気分では無かった。

2人はしばらく休み、退屈になった茜はアイスクリームを買ってきた。それを杉山は食べて、少しだけ気分が楽になった。

時間が勿体無いと思い、杉山はお化け屋敷に茜を誘った。茜は少し嫌な顔をしたが、それを見て杉山は仕返しだと思い、グイグイ腕を引っ張って行った。

入ると、廃墟のような所で、暗い長い廊下が続いている。

そこには何も無く、ただ、ピチャンピチャンと水が落ちるような音だけが聞こえていた。

2人は並んで歩き、茜が杉山の腕を掴んでいる。右に曲がる所まで来て、曲がると、2人の人が立っていた。驚いてビクツとなり止ま

ると、相手も止まった。鏡だった。

2人は苦笑して、先を進むと、天井から人が逆さまにぶら下がり下りて来た。あまりにも気持ち悪いメイクで杉山は小さく声を出してしまった。横でクスクスと茜が笑った。

少しムツとなったが、そのままぶら下がり人間の横を通り部屋に入った。

大きな声を出しながら髪の毛の長い人が3人走ってきた。怖いというより気持ち悪いと杉山は思い、とりあえず茜を引っ張って逃げた。

15分程で終わり、出た時にはまた杉山は疲れを感じた。

「怖がつてたね？」茜が上目使いで言う。

「いや、怖くは無かったよ。気持ち悪かったけど。やっぱりさ、お化けさんが可哀想だから走って逃げてあげただけだよ。」ちらっと茜を見ながら杉山は言った。

「ふーん。」

「何だよ。つか、茜はこういうの苦手なんじゃ無かったの？」

「全然。」クスツと笑う。

「あれ？じゃあ、さっき怖そうにしてたのは演技？」首を傾けて杉山が言った。

「えへへ。」

杉山の疲れは2割増した。

辺りも暗くなり始め、オレンジを黒が食べようとしていた。

その瞬間を少しでも上から見ようと、大勢の客が観覧車に集まっていた。杉山達も例外ではなかった。

運良く早めに並べた2人は、全てが黒くなる前に観覧車に乗れた。

「うわぁ綺麗・・・。」少し上にあがった時に茜が言った。

昼間は威張っていた太陽が、申し訳なさそうに沈んでいく。

やがて暗闇が上空を支配し、邪魔物が居なくなった空に、月と星が光り輝く。この時を待っていたかのように。

その時に杉山と茜はキスをした。恋人同士の観覧車はキスをするも

のだと決めつけていた2人は、12時の所に観覧車が着くと、ためらう事も無くスムーズに唇を重ねられた。

「きつと、ここに来るカップルはみんなキスをするんだよ。」杉山は言う。

「うん。」

残りの半分の時間を2人は寄り添いだだゆつくりと過ごした。

2人は茜の降りる駅までやってきて、バイバイと言い合って別れた。茜の満足そうな笑顔を見て杉山はホッとした。ベンチで休みすぎたかな？と今更後悔していた。ただ、あの時は仕方なかったかな？と思う自分もいた。

杉山も家から最寄りの駅に着き家に向かって歩いた。

空を見た。月も星も光り輝いているはずだったが、雲が太陽の代わりの邪魔者として、空を隠した。雨が降ってきた。僅かな雨がアスファルトを濡らす。きつとまだアスファルトは自分が濡れた事に気付いてない。気付く前に帰ろう、ずぶ濡れになる前に。杉山は走って帰った。

アスファルトは濡れたと気付いた。杉山はホッとした。

ユメと茜く恋愛感情く

連休最終日の午後。杉山は自転車を漕いでいた。雨は午前中にあがり、雲の切れ間から光が射していた。家を出る時にユメの家の方を少し見たが、それだけだった。自分には彼女がいるという思いが、杉山からユメを遠ざけていた。ユメがあまり近付いてきたり、話し掛けてきたりしないのも、きっと付き合っている事を知っているのだろうと杉山は思っていた。

杉山が向かったのはゲームショップだった。サッカーゲームの新しいソフトが発売され、予約をしていた杉山はそれを取りに行ったのだった。

日頃から運動はあまりしない杉山だったが、サッカー中継をみたり、スポーツニュースで世界のサッカーの結果等を見るのが好きだった。1度友達の家でサッカーゲーム対決をして以来、杉山は面白さにハマリ、何本かソフトを買う事になった。その中の1つの最新作がこの日に買いに来たソフトだった。その友達も同じソフトを買う事を話していて、1週間後には対決をするという約束まで決めていた。

杉山は立ち漕ぎで急いで家に向かった。買つてすぐのゲームを、はやくプレイしたいという気持ちで杉山の頭の8割を占めていた。対決には負けたくない……。

そのままの経ち漕ぎの勢いで、少し広い道路に出た時に、歩道を歩くユメの姿が見えた。

ユメの方も気を使ってくれているのだから、声をかけるのもどうかと悩んでいた時に、ユメがフラツとよろめき、手すりに掴まった。それを見た瞬間に、杉山はユメの所へ無意識に向かった。

「ちよつと！大丈夫？」横から杉山が覗き込む。

「……あ……大丈夫……」顔色の悪いユメが言う。

「大丈夫じゃないね。家まで送るから。ちよつとそこで休もう。」

そう言つて杉山は自転車を邪魔にならない所に停めて、ゲームの入った袋を持つてユメのすぐ横に並んでゆつくり歩き、近くにあったベンチに座つた。しばらく2人は何も話さず、ただ、小鳥や近くを散歩する犬の鳴き声だけが、音として機能しているようだった。杉山は水を自動販売機で購入し、ユメにすすめた。小さな声で礼を言い、ユメは1口飲んだ。また、2人は沈黙した。

徐々に顔色が回復したユメはもう1口水を飲んだ。
「ありがとう……。マシになったみたい。私ね、最近貧血気味でよく気分が悪くなるんだ。」揺れる木々を見つめながらユメは言つた。

「そうなんだ。貧血とかつて、俺はよくわからないからさ。」

「結構つらいんだよ。変な感じがするし。もう……。大丈夫だから。」

「歩けるなら、家まで送るから。」

「え？ いいよ。1人で帰れるから。」

「ダメだよ。心配だから。気になって、何も出来なくなっちゃうよ。」杉山は明るく笑う。

それから、少しして2人は立ち上がり、ユメの家へ向かつた。

お茶でも飲んでと誘われたが、自転車があるからと断り、小走りで自転車の所まで行き、また、立ち漕ぎで家に向かつた。

ユメの苦しそうな姿を思い出して、杉山は心に違和感を覚えた。心配な気持ちは確かに確認できたが、その違和感を形成する他の要因は分からなかつた。なんだかモヤモヤする感じはしたが、サッカーゲームを買つた事をすぐに思い出し、すぐに、ゲーム機の電源をオンにした。

思つた以上にリアルな内容に杉山は満足していたが、今の杉山の頭の7割はユメの事だった。

今までに感じた事のない感情が杉山を掴んで離さない。色んなピースを当てはめてみる。

過去にあつた出来事を思い返したりしてみる。初恋という言葉が浮

かび、当てはめる。僅かに合わない。恋という言葉と好きという言葉が近いのではないかと思ひ浮かべる。するとあっさりと心から違和感は無くなった。しかし、杉山の頭には違和感だけが残った。そんなはずはない。杉山は頭で繰り返した。茜を好きな気持ちは間違いない。ユメの事は好きだったが、それは小学生の時の話だ。なのにどうして？杉山は考えたくなくて、ゲームに集中しようとした。だが、杉山の使用するチームは失点を重ねるだけだった。これ以上やってもつまらないと思い、ベッドに寝転がった。自分の中に2人の人間がいて、それぞれが恋をしているのではないかと杉山は考えた。しかし、何を考えているのだろうか？と冷静になり、杉山はまた自分の感情に悩み始めた。

カウントダウンゝユメの父親ゝ（前書き）

体調を崩してから更新がなかなかできませんでした。
徐々にですが書いていきたいと思っています。

カウントダウン〜ユメの父親〜

軽く夕食を食べ、風呂に入った杉山は、何も考えたくない、逃げるように眠る事にした。

しかし、睡眠妨害スパイラルが杉山を現実の世界から逃がさない。夢の国は夢のまた夢のように感じられた。産まれて、思考している事を確認してからは、人間は安易に考える事を放棄出来ない仕組みになっていると、以前杉山が思った事がこの時に頭に蘇った。仕方なく色々考えてみる事にした。

茜もユメも好きなんだと自覚し、そこからどうすればいいのかを考えた。

ユメの事は昨日まで何とも思っていなかった。ユメを家に送り届け、それから急に杉山の心に入り込んで来た。なぜなのかは分からない。昔、ユメの家に遊びに行く事があった。その時の記憶が前面に押し出され、その頃に抱いていた恋心も一緒に出てきたのかもしれない。いや、それなら、ユメが学校に来た時に昔を思い出したのだから、今更なんておかしい……。

自分のわからない感情に揺さぶられるのはすごく不愉快だったが、抜け出す術を杉山は知らなかった。知らない間に杉山は眠り、朝をむかえていた。

学校にユメは来なかった。杉山は体調がまだよくないのかと心配になったが、ユメの携帯の番号も、アドレスも知らなかった。聞けなかった。友達に聞こうかとも思ったが、さすがに怪しまれるかなと思ひ諦めた。

それから数日が過ぎてもユメは学校に来なかった。クラスで色んな噂がたち、みんな心配しているようだったが、結局は何が原因なのか解らなかった。

茜に用事があり放課後地元の駅で降りて1人で歩いていた杉山は、どこか見覚えのある男性を見かけた。

男性も杉山に気付き驚いた表情で足早に歩いて杉山の方へ向かった。「あゝ、杉山くんだね！全然変わってないねえ！」明るく男性は言う。

「・・・あの・・・」温度差を感じながら杉山が言う。

「また、ユメがお世話になったね。」

「あ・・・」数回しか会ってなかったたので杉山はユメの父親をあまり覚えていなかった。

「なんだ？もしかして誰かわかってなかったのか？」笑いながらユメの父親は言った。

「あ、いえ・・・そんな事は・・・」杉山は視線を外しながら杉山は言った。

「この間は家まで送ってくれてありがとう。最近ユメはよく体調が悪くなつてたから助かったよ。」

「あの、幸村さんはどこが悪いんですか？」

「ん・・・やっぱりユメは言わなかったんだね・・・きっと君なら見舞いに来てくれると思ってたのにおかしいなと思ってたんだ・・・ユメは・・・入院してるんだ。」ふいに表情を曇らせてユメの父親は言った。

「入院・・・」体調がよくないというのは想像したりしていたが、まさか入院しなければいけないほどユメの体調が悪いとは思っていなかった。

涼しい風が杉山に当たったが、杉山はその風をものすごく冷たく感じた。

近くにあった喫茶店に杉山は連れて行かれた。

適当にメニューを奨められたが、杉山の頭は考える事を考えてて意味がわなくなっていた。コーヒーは飲めるか？との問いにだけ反応して首を横に振った。

ユメの父親は紅茶とコーヒーを頼んだ。

「杉山くん。君は今、彼女はいるかい？」突然ユメの父親が切り出した。

「・・・はい。」軽い返事だと杉山は思った。

「そうか。じゃあ、ユメの見舞いには来ない方がいい。」水の入ったコップを両手で包みながらユメの父親は言った。

「なんで・・・ですか？」少し大きな声で杉山は言った。

「君には彼女がいる。・・・。。もう・・・長く生きられないかもしれない女を見たら、君は・・・君はきつとユメに少しでも感情を移してしまうと思うんだ。」手をコップに添えながら体だけが地面に吸い込まれるように俯き、声と空気の境目辺りの声でユメの父親は言った。

杉山は思考回路にたくさんの結び目を感じた。わけがわからなかった。

明るく陽気だったユメの父親は気丈にふるまっていただけなんだと杉山は思った。少しでも悲しい顔をしてしまうと戻れなくなるんだなど。だから笑うしかなかった。混乱したりどこか冷静になったりしながら杉山はユメの父親を見ていた。ウェイトレスが紅茶とコーヒーを持ってやってきた。2人はなるべく普通を装ったが到底無理だった。

「俺たちは嘘が下手みたいだな。」赤い目をしたまま小さくユメの父親は笑った。

「そうですね。」下手な笑顔で杉山も笑った。

「すまなかった。単刀直入に言う。ユメの病気は・・・白血病・・・なんだ。助かる見込みは限りなく0に近いらしい。ユメの母親も同じだった。あいつらはそっくりだが、病気まで似なくてもいいのにな。」所々にため息を混ぜながら、俯いてゆっくり言い、ユメの父親は薄く笑った。

杉山は何も言えなかった。この人はどれだけ辛い思いをしているんだろうと、ただそれだけを考えていた。

「俺は最低の旦那で父親だ。妻の病気にも気付いてやれず、同じ病

気の娘も気付いてやれなかった！もつと早く気づいていれば2人も助かったかもしれないのに！」続けてユメの父親は言つと鼻をすするだけで何も言わなくなった。

「あの・・俺、お見舞い行きますから。」しばらくの沈黙をやぶつて杉山は言つた。

「幸村さんも、あなたも、俺の彼女も関係ないです。俺が行きたいから行きます。感情とかそんな事はどうでもいいんです。俺は俺が行きたいから・・。」杉山は真つ直ぐユメの父親を見て言つた。

「・・ああ・・そう言ってもらえると・・・。きつとユメも喜ぶと思う。でも・・小学生の時と君の性格が変わっていないとしたら、ユメから聞いていた君の話が本当なら君は優しすぎる。間違いなく君は辛い思いをしなくちゃいけない。」

「いいんです。俺がそうしたいから。」

ユメの父親は大粒の涙を流した。しばらくただ泣くだけだった。そして涙がおさまると杉山を真つ直ぐ見た。

「ユメが・・・1日でも長く生きれるように、1日でも長く笑えるように手伝つてほしい。あの子は誰にも心配されたくないと言つて入院の事は内緒なんだ。杉山くん、君にしか頼れない。私だけではあの子をたくさん笑わせてやれない。もう私はどうしたらいいかわからなくなつてたんだ。恥ずかしい話だが、父親失格なんだ。どうか、どうかあの子を最後まで笑わせてやってくれ。お願いします。」深々と頭を下げてユメの父親は言つた。

「はい。」すぐに短い返事をして杉山は下手に笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9855e/>

僕が君に出来ること。

2010年10月10日06時15分発行